東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十六卷　第三號

昭和三年三月一日發行

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

論叢

相續稅の逋脫……法學博士　神戸正雄
リカアドの勞賃論……經濟學士　堀經夫
利潤成立の機構……文學博士　高田保馬
定期船事業における運送原費と運賃との關係……經濟學博士　小鳥昌太郎

說苑

琉球の廢藩後に於ける治制……法學博士　山本美越乃
フィジオクラートの價値論……經濟學士　山本勝市
委任經理に就いて……經濟學士　楠見一正

雜錄

フォード制とテイラー制……經濟學士　星野周一郎
營業稅と營業收益稅……經濟學博士　汐見三郎

（藝轉載）

フィジオクラートの價値論（上）

山本勝市

はしがき　一、價値の定義　二、價値の發生——その歴史的社會的性質　三、價値の決定原因　四、價値の分類　五、價値と再生産との關係。

はしがき

マルクスの資本論を讀むものは、彼れがフィジオクラートを引用する場合、常にデール（E. Daire）の編纂になれる『フィジオクラート』Physiocrates. Paris, Guillaumin 1846 によれるを知るであらう。また、彼マルクスがフィジオクラートの價値に關する思想を問題とする時は、いつでも、右の書に含まるゝルトローヌ（Le Trosne）の『社會的利益について』De l'interêt social[1] によれることに氣附かるゝであらう。

私が今こゝに、題して『フィジオクラートの價値論』といふのも、實は、このルトローヌの價値論なのであり、參考とせる原文も亦、マルクスが引用せると同じデールの版本の、而もマルクスが引用しつゝある、其の『社會的利益について』なのである。

フィジオクラートの價値論を論ずるものは、ルトローヌの此書を引くを例とする。併しフィジ

1) 正確には、De l'interêt social, par rapport à la valeur, à la circulation, à l'industrie et au Commerce intérieur et extérieur, 1777.

オクラートといへば、いふ迄もなく、ケネーを中心とした幾多の學者の集りであるから、ルトローヌの述ぶる所の、一から十迄が、すべてのフィジオクラートによつて承認されて居たとは、常識でも考へられない。從つて言葉の嚴密な意味では、彼の價値說を以て、フィジオクラートのそれと呼ぶことは當らぬであらう。

けれども、第一にはルトローヌといふ名前が、我學會ではあまりに知られて居ない樣でもあり、[2] 第二には、フィジオクラートが、メルカンチリストと異り、その全體が、思想的に、極めて密接に一致せしことは一般に認めらるゝ所であり、最後に私の知る限り、ルトローヌに異說をなすフィジオクラートも居ないのであるから、[3] しばらく通說に從ひ、彼の說を以て、フィジオクラートの價値說を代表させても、必らずしも不當ではあるまい。嚴密には『ルトローヌの價値論』となすべきを、敢て『フィジオクラートの價値論』と題した所以である。

上述せる如く、本論文の目的とするところは、ルトローヌの價値論をうかゞふにあつて、彼の『社會的利益について』全體を紹介するにあるのではない、が併し、同書に於ける價値論の地位を理解するためには、同書の由來とその構成について、片言を費して置くのが便利かと思ふ。

同書の由來は、著者がそのはしがきに明にして居る樣に、コンディヤックの『商業と政府』La Commerce et le gouvernement, considérés relativement l'un à l'autre 1776[4] に促がされて、その誤を指摘し、且つそれを機會に、題目の示すが如き諸問題卽ち價値、循環、工、商業に關聯して社會の利益の何たるかを示さんが爲めに、翌一七七七年に初めて公にせられたものである(註)。

2) 獨逸でもあまり注目されて居ないためか、K. Diehl u. P. Mombert の Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie の „Wert u. Preis" の部にも擧げられて居ない。
3) 私は Turgot をば Physiocrates のうちに數へない。
4) 私の以下に引用するものは、Oeuvres complètes de Condillac T. IV, 1821

（註）『價値、循環について、及び商工業の性質及結果について、人々の陷れる理論上の誤謬は、行政の方面に於て、多くの實際的誤謬を惹起した。人々は生産物の價値に對し、その販賣に對し無數の障害――その結果は耕作の減退、國家收入の減少、從つて食料と共に減ずる人口の減少を齎す――を引入ることを氣遣はなかつた。人々は富の生産の法則並に其の分配の法則を知らなかつた。……此の無理なそしで吟味なしに受入れられた思想の混同から、どうして社會的利益を無視せずに濟まうか。……余が「社會秩序」に關する講演に於て敎へ、今又本論文に於て、秩序的に說かんとする學說なるものは、この十五年以來數個の著述に於て、公にせられ、證明せられ、說明せられたものである。併し未だ十分ではない、なぜならば、コンディヤック僧正の如き、有能なる著者が、たゞ其の學說の一部を採用せるにすぎぬ故である。……私はコンディヤックの著述の順序を追はずに、本書の內容が關係するに從つて彼の原理を論評するであらう。此書は一般を敎育するといふ以外の目的をもたぬ、だから此の論議に於て私はコンディヤック氏の價するすべての尊敬を捧げ、且つ彼が私に示さうとした友愛を毫も失はないつもりである。』[5]

而して右の『商業と政府』に於て、コンディヤックが、自ら『經濟學の諸原理を述ぶる』と稱する[6]その第一篇の、劈頭第一章に『事物の價値の基礎』Fondement de la valeur des choses. を述べ、第二章に『事物の價格の基礎』Fondement du prix des choses を論じ、續く第三章で『價格の變動』De la variation des prix. を取扱へるに對して、ルトローヌの『社會的利益について』も、その冒頭の第一章を『價値と價値の種々なる原因について』と題し[7]、今私の手許にあるデールの版では四析版十七頁をば、全部價値の論議に割いて居る。コンディヤックが、これを『經濟學の原理』と述べ、ルトローヌが、これに開卷冒頭の一章を割いて居る點から考へても、價値に關する問題が、十八世紀經濟學誕生の當初に於てすでに、斯學に於ける中心問題の一つとなつて居たことを察す

である。

5) Physiocrates, par Daire 1846 pp. 885- 886.「社會的利益について」のはしがきの一節。

6) Condillac. p. 2. „Dans la première,....; et je développe les *principes de la science économique.*"

るに難くない。テキストを見る機會を持たざる論者達が、やゝもすれば想像するであらう如く、此の問題は、彼等にとつては、たゞ種々なる政策的論策の序にその頭を散見せしむるに止る程、しかく輕少な問題でなかつたことは、先以て注意を喚ぶに値する事實だと考へる。

右述ぶるが如く、ルトローヌの『社會的利益について』の第一章は、『價値と價値の種々なる原因』の說明に當てられて居るのであるが、此の第一章は、更に、次の如き題目をもつ十七の節に分たれるのである。

第一、諸の欲望(besoins)。それ等を充足する諸の手段。
第二、人類の勞働に助けられたる土地の生產力(Fécondité)。
第三、生產物に於ては、其の效用(utilité)と其の價値(valeur)とを考察せなければならぬ。
第四、價値の定義(Définition de la valeur)。
第五、價値の第一の原因、卽ち有用力(la propriété usuelle)。
第六、効用は價値の尺度には非ず。
第七、價値の第二の原因、卽ち不可避なる出費(les frais indispensables)。
第八、第三の原因、卽ち稀少又は豐富(la rareté ou l'abondance)。
第九、第四の原因、卽ち競爭(la concurrence)。
第十、生產物自體がその價値の外的(彼岸)の原因(la Cause ultérieur)なり。
第十一、價値は人口及び人口の安易(l'aisance)に依存する。
第十二、再生產と消費とは相互に尺度である。
第十三、人は價値によるの外、再生產を改善し((améliorer)得ない。

7) De la valeur et de ses differentes causes.

第十四、價値の重要(Importance de la valeur)。
第十五、價値は一國の狀態の檢溫器(le thermomètre)である。
第十六、富の上に影響するものは、第一の手[8]に於ける價値より外にない。
第十七、要約。

以下私は、私の見て以て最も便利とする次の順序に從つて、出來るだけ忠實に、彼の價値思想の要旨をさぐるであらう。たゞ價値論は私見によれば、フィジオクラシー經濟思想の礎石の一つをなすものであり、從つて之を、十分に論ずるためには、勢ひその全體系に亘らねばならぬのであるが、斯の如きは素より研究の途上にある私の、殊にかゝる小論文に於て、到底なし能はざる所に屬する。

一　價値の定義

『價値は、或る物と他の物との間に、卽ち一の生產物の或量と他の生產物の或量との間に、存在する交換の割合の中に存する。[9]』『價値が交換の割合の中に存する』La valeur consiste dans le rapport d'échange といふことは、勿論價値自體が交換の割合（乃至比率）と同一物だといふ意味ではない。それは『物の他物と交換され得る力[10]』La propriété qu'elles ont d'être échangées les une contre les autres を意味するには違ひないのだが、たゞ、此の力はその一物に固有絕對な大きさを有するものではなく、交換關係に置かるゝ他の物の交換力と相對的な一の大きさに外なら

8) 彼等の所謂生產階級卽ち農業者の手を指す。後に說明すべし。
9) Physiocrates, p. 889(マルクス資本論第一卷カウツキー版第四頁參看)
10) Ibid., p. 888.

ぬといふのである。それ故に又、一物の價値の大きさは、其物自體の上には何等の變化なくとも、交換の相手方となる他の物の上に起れる變化によつて變化し得るものとなる。[11]

元來價値論上、重大な問題の一つは、物の價値が、絶對的の大きさなりや、相對的の大きさなりやといふことであるが、此の問題について、ルトローヌの見解は、相對的の大きさに止まる、となすものにして、今日多くの經濟學者の通說に合し、又マルクスのそれとは異る。

二　價値の發生——その歷史的社會的性質

前項に於けるが如く定義せらるゝ價値は、如何にして發生するに至れるかといふに、彼の見解では、そは交換といふ事實に起源を有する。

『生產物を評價(estimer)するに、其の有用性(qualités usuelles)のみによつてするは、未だ十分でない。更にそが相互に交換され得る力を……考慮しなければならぬ。仲間と關係を持たずして、たゞ己れの收穫によつてのみ生活を營める孤立人は、其の生產物につき單に其の個人的效用(utilité personelle)を評價するに過ぎぬであらう。然るに二つの家族が相近くつくらるゝに至ると、兩者の間に、一の勞働の自然的協力(une association naturelle de travaux et de services)がつくられ、交換が起りて、すべての欲望を充し、享受を擴大し、相互に己が過剩とするものを以て、己が缺くる所のものを得るの手段を見出さしむるに至るであらう。[12]

『故に、人類が社會をなす狀態に至ると、生產物は、一の新たなる性質を獲得する。此の新た

11) Ibid. X.
12) Ibid. p. 888, 889.

なる一性質は、人類相互の交通（la communication）から生れるものである。此の性質とは卽ち價値のことである。[13]』

斯樣に、價値は人々相交通して行ふ交換といふ事實に由來するものであるから、未だ交換の行はることなき孤立人に、事物の價値といふ現象が存在しないのは無論のことであるが、たとへすでに交換の存する社會にあつても『交換に入込まざる生產物』卽ち生產せる農民が直接自身の消費に供する部分は、毫も價値に影響するものではない。『價値は交換の割合のうちに存するものであるから、價値に影響する所のものは、交換された生產物又は交換さるべく運命づけられた生產物の分量以外にはない。故に生產者自身によつて現物のまゝ消費せらるゝ部分は、毫も商業（コンメルス）に入込まざるものであるから、價値に寄與するものではない。然し他人の生產物を消費するものは、すべて等價を與ふるの外それを手に入れることが出來ぬから、そこで契約者が相互にバランスに置く所の二物は、一の交換價値（une valeur d'échange）を獲得する。[14]』といへるは、卽ちそれである（註）。

（註）ルトローヌが、このことを力强く主張せるは、いふ迄もなく、コンデイヤックの『商業と政府』に、『吾人が一物に欲望を持つや否や其事物は價値を持つのであつて、交換が問題となる以前に於て、それを持つのである』[15]といひつゝ『未だ交換なき小植民者』の間にすでに價値の存することを主張せしを目標として居るのである。[16]たゞ、吾々としては、たゞこれだけの引用句によつてコンデイヤックの價値論を評價してはならない。彼とこれとは、價値なる語の用法を異にするからである。私は別の論文に於て兩者の異同を明にせんと企てつゝある。

13) Ibid. p. 889.「價値」la valeur といふ言葉のみイタリック體で書かれて居る。
14) Ibid. p. 889, 890.
15) Condillac, t. IV. p. 30. 31.
16) Ibid. p. 3.

ともあれ、ルトローヌが事物の價値を以て、たゞに效用と區別するに止らず、之を交換の可能と結びつけ、[17] そは『人類が社會をなす狀態』に至つて『生產物が獲得せる一の新たなる性質』une qualité nouvelle となす點は、彼れが、すでに、價値の歷史的社會的性質を理解せるものとして、吾人の注目を値することである。『彼等にとつて價値は未だ物質に外ならなかつたのである。』[18] とか、『彼等には明瞭なる價値の概念が不足して居る。彼等の問題とする所は、人類活動の或る一定の社會的存在形式たる價値ではなく、資料土地自然及び其の資料の變形から成立つ所の自然物である』[19] 等々の批評は、ルトローヌ自身を讀む者の、俄に承認し得ざる所である(註)。

(註) なほ次の一句を玩味せられよ。『土地は、實際、性質上吾人の欲望に適しうる物質的性質をもつ生產物を與ふるにすぎぬ。而してそれに價値、即ち相對的一時的なる性質を附與するものは交換なのである』La terre, à la Vérité, ne donne que les productions qui tiennent de la nature la qualité physique d'être propre à nos besoins; et c'est l'échange qui leur attribue la valeur, qualité relative et accidentelle.[20]

三　價値の決定原因

價値自體の發生を交換といふ社會的歷史的事實に求むることは、以上述ぶる通りであるが、然らば、かくてあらはるゝ各事物の價値の大きさは如何なる原因によつて決せらるゝか。此の點を考察する前に、一般的に先づ注意すべきは、ルローヌが價値決定の原因をば、例へば勞働とか、乃至は效用とかいふが如き、たゞ一個の原因に歸することなく、數個の原因の共働の結果定

17) なほ Physiocrates, p. 891 參看。
18) 久留間氏、社會問題講座第十卷論文第二十八頁。
19) 森氏、經濟論叢第二十四卷第百十五頁。
20) Physiocrates, p. 896.

まるものと見て居る點である。卽ち『價値を決定する所のものは、結合せる數個の原因である。それ等諸原因の共働(concours)の結果價値が定まる』[21]と、先づ一般的態度を示した後、彼は、所謂數個の原因なるものを列擧するのである。たゞ彼れが如何なる研究方法によつて、それ等を——而してそれ等のみを——價値の決定原因と見るに至れるかは、彼れの叙述からだけでは明瞭でない。恐らくは事實の直接の觀察から、たゞ單に列擧せるものゝ如く見える。

そは兎もあれ、彼れが價値決定の原因としてあぐるものゝ第一は、事物の有用力卽ち效用である。『價値は先づ第一に、有用力(la propriété usuelle)を基礎とす。事實、何等の效用(utilité)をも持つことなき一物は、價値を持ち得ないであらう。』[22]

勿論彼れは、事物の有用性又は效用を以て、事物に固有絕對なる一の性質とは考へず、つまり、それを以て、人の欲望に對して相對的なものと見て居るのである。

『效用なるものは、相對的(relative)なものにすぎない。蓋し同一物がある者に對しては有用であり、他の者には不用であると考へうるからである』[23]若し效用が、物に絕對的な性質に止まるならば、さういふことはあり得ない譯である。而してルトローヌは、一の事物が價値を持つがためには、社會の誰かに有用だといふことが、判斷されて居りさへすれば十分だと見るのであつて、此の點に於ては、正しくコンディヤックの說を肯定するものといはねばならぬ。[24]

彼れが、效用を以て、價値發生の條件と見るに止らず、價値の大きさの決定要素と見たることは『一物に於て從來知られざる一の力を見出すことは、其物に價値を與へることであり、すでに

21) Ibid. p. 890.
22) Ibid. p. 890.
23) Ibid., p. 890.
24) Condillac, p. 10 參看。

用途を持つ一物のうちに、新たなる一の用途を發見することは、その物の價値を增加することである。[28]』といへるによつて知り得る。

たゞ彼れは、效用を以て、價値の大きさを決定する唯一の尺度と見ないのみならず、事實上、さまで大なる役割を持つ要素とも見て居なかつた樣に見える。『價値は何等かの效用を前提、することはいへ、ために、それが效用の程度に比例するといふ結論にはならぬ。價値を決定する原因はなほ外にもあるからである』[26]といひ、又『若し然らずんば、最も必要(ネセッセール)なものが、最も多くの價値を持たねばならぬ筈であるが、而も事實は反對である』[27]と云へるによつて、それをうかゞふことが出來るであらう。

價値の大きさを決する第二の原因として彼のあぐるものは、『物の生產に要する不可避なる出費』les frais indispensables である。卽ちいふ『價値の他の一原因は、一物が要せし(couter)不可避なる出費である。……此の不可避なる出費が價格によつて回收さるゝことは、何にも先んじて必要である。[28]』と。

然らば、彼が不可避の出費を以て、價値構成の一要素と考ふるに至れる根據は何かといへば、そは、最後に、再生產との關係をのぶるの條に一層明にするであらう如く『若し彼等の要せし不可避なる出費が、價格によつて回收されないならば、人は最早、再生產を繼續するために、同じ勞働と同じ資本(avances)とをつゞけるの意志(volonté)も可能(pouvoir)も持たぬであらう』[29]からである。而して、こゝに所謂『不可避なる出費』とは、社會的に必要なる生產費といふに等しい(註)。

25) Physiocrates p. 890.
26) Ibid., p. 891.
27) Ibid., p. 891. 892.
28) Ibid. p. 893.
29) Ibid. p. 893.

（註）『價値のこの原因は、正當であり且つ不可避なるものではあるが、個々の場合には、大なる部分に於て其の作用を止むることが起り得る。肥えた fertile 且つ良く耕された土地の生産物が大なる剩餘を生むに不拘、痩せた ingrat 且つ惡く耕された土地は、純生産物 produit net を與へぬことがあり、往々にしてすべての出費を回收し得ないことすらある。といふ譯は、同一種類の生産物はすべて本來、價格が、一般的に個々の事情に關係なく決定せらるゝ所の、一個の塊(une masse)を形成するにすぎぬからである。[30]』

なほ、地代が、不可避なる出費の一部として、價値價格の一部を構成せざるべからず、と特に注意を促せるは[31]、看過し難い。たゞ彼等は、地代のうちに、所謂差額地代と、絶對地代とを區別するに止らず、(其の區別を初めて明にせるは、私の知る限りでは、通說の如くロードベルツスでも、マルクスでもなく、マルサス、リカードを承けたシモンド・デュ・シスモンディーである。[32]がそれは兎も角)地代論が當時なほ、純粹な議論の對象とならざりし爲めに、地代はその全部が價値を構成する要素となるや、又其一部(卽ち絶對地代)に止まるやは、なほフィジオクラートの經濟學では、判然たる問題を形成して居なかつたものと思はれる。

更に彼は、『價値決定原因の第三のもの』として、事物の『稀少』又は『豐富』la rareté ou l'abondance をあげる。今日に於ても普通の經濟學書は、價値決定要素の一つとして、事物の稀少性(Scarcity, die Seltenheit, la rareté)を數ふるを常とするが、それは十八世紀エコノミストの間でも、すでにそれは通說であつたものゝ如く見える(註)。

『稀少か豐富かも亦、價値に多大の影響を及ぼす原因である。[33]』

30) Ibid. p. 893.
31) Ibid. p. 893.
32) Simonde de Sismondi ; Nouvaux principes d'économie politique. chap. XIII. 私の手許にあるものは、1827年の第二版であるが、この章が1819年卽ち Marx の生れた翌年に出た第一版に於てすでに存することは、本文及び第

『其性質上一の財たる一物が固有價値（この意味は後にのぶ――山本）を有するが爲めには、其獲得が誰しも勝手氣儘といふ程にしかく容易であつてはならぬ。その豐富の度に限りがあり、其の獲得の可能性が限定されて居なければならぬ。水は欠くべからざる一の財ではあるが、併し一の固有價値を持つには餘りにコンモンである。』[34]

（註）私は、コンディヤックの『商業と政府』第十七頁の次の言葉及びその筆致によりてしかいふ。Ceux que je combats regardent comme une grosse méprise de fonder la valeur sur l'utilité, et ils disent qu'une chose ne peut valoir qu'autant qu'elle a un certain degré de rareté. *Un certain degré de rareté!* Voilà ce que je n'entends pas.

價値の原因としての事物の『稀少性』に關しては、特に注意すべきことがある。卽ちそれは、彼れが、事物の稀少性を以て『本來物理的なものではあるが、併し又相對的なものである』[35]となす點である。換言すれば、例へば、硝子は金剛石よりも豐富であり、雀は烏よりも多いといふ現象は本來、物理的なものである。それは一つよりも二つは、より多く、二つよりも一つは、より少いといふことなのである。だが然し價値の要素としての稀少又は豐富は、かゝる物理的な絕對量が、人間の需要供給と相對的に考へられた意味にすぎない、といふのであつて、彼れが『事實消費者の數を增加すれば、豐富（アボンダンス）の狀態は最早價値に對する一の障害ではなくなるであらう。商業によつて生產物の分量を增加すれば、地方的稀少性は最早感じられぬであらう。或地方を苦しむる霞霞が、たゞ單に個々の不幸に止まり、價値に對して何等の結果をも及ぼさないのは右の理由に基くものである』[36]といつて居るのは、かゝる意味であり、さきに述べた、事物の效用をば、事物の絕

二版要約目次の脚註によつて知り得る。シスモンデイの絕對地代說には、殆んど何人も注意して居ない樣であるから、餘事ながら一言す。

33) Physiocrates. p. 894.
34) Ibid. p. 891.
35) Ibid. p. 894.

對的性質とのみ解せざると同じ考方である。而してかく初期の經濟學者達が、價値の決定に於ける主觀的事情を無視し得なかつたのは、思ふに、コンディャックの驚くべきするどき批評の功績に歸すべきであらう。

更に注意を値することは、ルトローヌが、價値の原因としてあぐる諸原因の各が、現實に價値の決定に參與する役割の重要度は、事物によつて、異なると見て居る見解である。それは決して稀少性にのみ關するものではないけれども、彼れが稀少性に關聯してそれをのべて居るので、私もそれをこゝに一言することゝした。『奢侈、好奇、純粹なファンテジーの諸物については稀少性が主たる役割をする云々』[37]と云つて居るのは、其の見解を示すものである。こうした考方自體は決してフィジオクラートに初まるものではなく、カンチョンのすでに極めて明瞭に述べて居る處ではあるが、[38]併し價値を數個の原因に歸する論者の必らず、觸れなければならぬ問題であらう。

價値決定の第四の原因として、彼のあぐるものは、競爭である。而して所謂競爭とは、彼の言葉によれば『消費者の競爭と賣らるべき生產物の競爭』[39]とを意味するのであり、且つ競爭は價値をば『終審的に決する』[40] decide souverainement となすのである。終審的に決するといふ言葉の意味は、彼の說く所あまりに簡にすぎて十分明瞭にし難い。『競爭は上來述べ來れる諸原因に從應しての外、價格の法則を定むるものではない』[41]といふ言葉の如きは、叙上の三原因が第四の競爭といふ形を通して作用すると解しうる樣でもあるが、併し、彼れが無條件に四原因を列擧し又『此等諸原因の各は、それ〴〵固有の影響を持ち事物の與へられたる狀態に從つて作用する』といへ

36) Ibid. p. 894.
37) Ibid. p. 894.
38) Cantillon, Essai sur la nature du commerce en général (1755) 私の手許にある Mauvillon, Discours politique de M. Davide Hume 1756 t. 3. におさめらるゝものでは、 p. 175.

るより推して、私はしばらく、以上の四原因が同列に並べられて居るものと解し、從つて『終審的に決する』云々も、單に競爭が價値の決定上、甚だ重大なる作用をなすといふ位の意味に解して置く。（特に先輩の敎を乞ふ）

今右に引用せる所に、私が圈點を附した『事物の與へられたる狀態に從つて作用する』といふ言葉は、實はルトローヌにとつては、無意味な言葉ではない。なぜといふに、彼の見解では、以上の四原因は、共働（コンクール）の結果、事物の價値を決定するのではあるが、その場合事物の異なるに從つてそれ〴〵の原因の作用する役割の重要度が異なるのみならず、同種の事物についても亦、時所を異にするに從ひ、各要素の狀態が變動しつゝあると考へるが故である。而して要素が變動しつゝある限り、『價値は決して確定 fixer されないし、又され得ないものである』となすは、素より當然のことである。『此等諸原因の各〻は、それ〴〵固有の影響を持ち、事物の與へられたる狀態に從つて作用する。然るにこの事物の與へられたる狀態は不斷に變動のうちにあるものであるから、價値は確定されないし又され得ないのである。[42]』

ルトローヌが、事物の價値を決定する原因として、番號を附して、列擧するものは、以上第一より第四に至る四つであり、且つ四つに限る。然るに彼は、以上の外、節を明にし、且つ番號を附することなくして、『價値の外的原因』Cause ultérieur なるものを附加し、且つ、生產物自體が價値の外的原因なりとなして居る。一體それは何を意味するものであるか。

私はさきに、價値の定義をうかゞふに當り、價値は交換の割合のうちに存し、その力を絕對的

39) Physiocrates. p. 895.
40) Ibid. p. 895.
41) Ibid. p. 895.
42) Ibid. p. 895.

大きさを有するものではなく、交換關係に置かるゝ他の事物の交換力と相對的な大きさを有するにすぎぬものであるから、『一定の物の價値の大きさは、其物自體の上には何等の變化なくとも、交換の相手方となる他の物の上に起る變化によつて、變化しうるものである。』といふことを云つた。今價値の外的原因は、このことに關聯を持つ。

卽ち一物は、上述し來れる如く、その效用、その生產に要する費用、その稀少性、並にその物の賣買に關する競爭の四者が共同作用によつて定まるといひうるのであるが、それ等はその事物の上に起る事情で、いはゞ內的原因といふべきものである。若し之を川に比すれば、それ等はすべて流のこちら岸に起れる事情を見たものである。然るに價値の發生を交換に求むる場合、交換の相手方の增加は、どりもなほさず、その事物の價値を增し、その反對の場合には減少せざるを得ない。かくして對岸の事情は、此岸の事物の價値に此岸の事情は對岸の價値に、互に外的原因として影響をもつ。コーズユルテリウールと稱するは、かゝる意味に於ける對岸の原因を指す。而して『生產物自體が價値の外的原因なり』といふは、ある一物の生產の增加は、交換せらるべき他物の價値の增加の外的原因であり、交換せらるべき他物の生產增加そのものは、此の事物の外的原因なりといふ意味である。

『吾人は、更に進んで、價値の外的原因如何を探らねばならぬ。而して吾人は、それが生產物自體であることを認める。この見地は極めて重要なるものである。價値の本體(le principe)たるものは生產物自體である。生產物はすべて交換のバランスの中に入り込んで、相互に、相手

(contrepoids) となる。故に消費物の分量のみならず亦、其價値を決定するものは、耕作の狀態である。蓋し交換によつて、その事物を得る能力を決定するもの、その事物を支拂ふべき手段の多少を決定するもの、は耕作の狀態だからである。[43]』

こゝで吾々は、ルトローヌの價値論に於て一見矛盾に見えるが如き一點に到着して居る。『生産物の增加は、價値の增加の原因なりや、その減少の原因なりや』といふ問題がそれである。彼は一面に於て生産物の稀少は價値を增加し豐富は之を減少すと說きつゝ、他方に於て、生産物の豐富は價値の增加の原因なりと主張する。此の問題は、ルトローヌ自身がすでに、自ら之を問ひ且つ自ら之に答へて居る所である。

『人或は反對して次の如くいふであらう。卽ちこの汝の見解は、豐富及び稀少が價値に影響すといふ原理に矛盾する。豐富は價値を減少する所か、之を增加し、少くとも之を維持するの結果を持つことになりはせぬか、と』[44] この自問に對して彼は、先づ『そこには毫末の矛盾も存せぬ』と前提しつゝ、次の如き回答を與へて居る。『ある一定の生産物が豐富なる時、他のすべての事物に變化がないならば、その結果としてその物の價値を減少することは確である。換言すれば、吾人は平年と同じ收獲に止まる他の一生産物を得るがために、(平年よりも豐富な生産物をば)昨年よりもより多く與へるであらう。その逆も亦眞である。蓋し、消費者の數も、他の生産物の分量も增加することなくして、當該生産物のより大なる量が交換にあらはるゝが爲である。故にそれが賣られ得るためには、其價格を引下げねばならぬ。換言すれば、他の生産物の一定量を得るが

43) Ibid. p. 895, 896.
44) Ibid. p. 896.

ために、いつもよりより多くを與へねばならぬ。なぜならば、自己の生産物との交換によるの外、問題の生産物を支拂を得ることの出來ない消費者に對し、問題の生産物を支拂ふべき能力(ツアキユルナ)が增加されてゐないからである。餘りに豐富な生産物の所有者にして若し其手を弛めることを欲しないならば、その生産物の一部は彼等の手許に殘るであらう。故に彼等所有者達は、事物の自然により、卽ち賣らんとする欲望、及び彼等の間に存する競爭によりて、その價格の引下げを餘儀なくされる。[45]』

卽ち交換の相手が增減しないのに、ある一物の生産が增加するときは、右述ぶるが如き機構によつて其の事物の價値は減少せざるを得ない。『其逆も亦眞である』[46]といふのだから、他の事物に增減なき場合に、その生産の減少せる事物の價値は增加せざるを得ない。私はこの明瞭な論理、卽ち價値を交換物間の相對的大さと見る見解の必然の論理が、ルトローヌに於て如何に十分に貫かれて居るかを示すがために、餘りにも長い引用をして來た。併しながら、なほ一層の明瞭を期するがために、今すこしく引用をつゞけねばならぬ。

他の生産物に增減なき場合に於ける一物の生産の增減は其の價値の減增を齎すものとすれば、更に、すべての種類の生産物が等しく豐富につくらるゝ場合價値はどうなるか。曰く價値は增減なく、もとのまゝに維持せられ、たゞ消費の增加あるのみと　素より、論理の當然の歸結はさうなくてはならぬのだが、併し十八世記の經濟學者としては、分析の明瞭なる、一の驚きを値するであらう。

45) Ibid. p. 896, 897.
46) Ibid. p. 896.

『今すべての種類の生産物が等しく豊富な一年を假定せよ。而もなほ吾人は、それ等の生産物が、すべて其價値を減するといひ得るであらうか。若し吾人が其の外見のみを見、各生産物と貨幣との關係を個々に見るならば、恐らくは左樣にいひうるであらう。さり乍ら、若し商業なるものが交換によるの外、行はれぬものとすれば、吾人は消費が著しき增加をなしたと云はねばならず、而して各生産物は、其價値卽ち其交換の割合を失つたといつてはならぬであらう。なぜといふに、吾人は、或る生産物のより多くを與ふるに至るけれども、其代り、他の生産物のより多くを受けるからである。かくして相對的平等は維持せられ、たゞ消費に於て絕對的變化があるに止まる。[47]』

かくて、ルトローヌが、生産物自體を價値の外的原因なりといふは、前に述べたるが如し、一物の生産が他物の價値の外的原因なりといふ意味であり、こゝでも亦、吾人は、彼れの價値が、物質そのものと十分に區別せられて居るのを看取し得るのである。

47) Ibid. p. 897.